

被災地の今

新聞やテレビで目にする被災地のようすは、切り取られた一部の時間。東日本大震災・福島第一原子力発電所の事故から今に至るまでの8年におよぶ時間のうち、私たちはほんの数時間分しか見聞きしていないのかもしれない。

北海道内の避難者登録数

避難元	人数
岩手	62
宮城	36
福島	937
その他*	180
合計	1,542

(北海道 2018年12月現在)

※「その他」は主に関東圏。

仮設住宅(プレハブ等建設分)の入居者

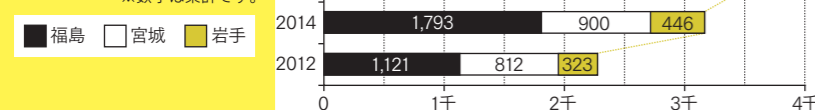
	戸数	入居者数
岩手(8市町村)	3,047	6,205
宮城(6市町村)	2,117	4,144
福島(20市町村)	2,377	4,083
合計	7,541	14,432

(各県 2018年12月現在)

震災関連死の推移

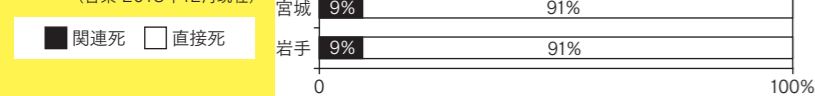
(復興庁 2018年9月現在)

※数字は累計です。



死亡原因の割合

(各県 2018年12月現在)



震災関連死者数は、災害弔慰金の申請を遺族が行い、各市区町村が設置する機関により、直接死以外で「この震災が原因で死亡した」と認定された方の数です。



岩手県野田村/千年以上の歴史を誇る十府ヶ浦海岸で、息をのむような防潮堤工事



宮城県気仙沼市小泉海岸/陸と海を遮断するかのような高さ14.7メートルの防潮堤



福島県飯館村/2018年の段階で150万袋ともいわれる除染廃棄物の減容のため、村の南では焼却を、また再利用のための実証事業が行われる

写真は2018年2月に撮影したものです。それから1年経った各地のようすは、会場モニターにてご覧いただけます。

9年目の3.11

3.11

SAPPORO SYMPO

平成30年北海道胆振東部地震による被害状況

※被害の大きい4市町を抽出(2019年1月現在)

建物の損壊被害

	住家被害			非住家被害		
	全壊	半壊	一部損壊	全壊	半壊	一部損壊
札幌市	95	684	4,352	7	24	184
厚真町	222	308	1,045	659	656	798
安平町	93	351	2,412	341	552	2,167
むかわ町	30	119	3,147	143	67	477

みなし仮設居住者数

	みなし仮設居住者数
札幌市	117世帯
厚真町	178世帯(398名)
安平町	121世帯(215名)
むかわ町	58世帯(105名)



主催 3.11SAPPORO SYMPO 実行委員会

(北海道NPO被災者支援ネット、札幌駅前通まちづくり株式会社、一般社団法人北海道ブックシェアリング、北の里浜 花のかけはしネットワーク、株式会社ギガデザイン、NPO法人北海道NPOサポートセンター、月輪会、ほか個人有志)

詳しくはホームページまたはフェイスブックからご覧いただけます

<http://311sapporo-sympo.com/> サッポロシンポ 検索

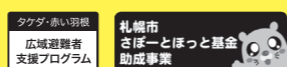
ひとはもっとシンポする。
まちはもっとシンポする。

協賛 ▲札幌駅前通まちづくり株式会社
連合北海道
NPO法人日本自治ACADEMY

協力 吉川Family Presents「僕らの街から」、NPO法人札幌障害者活動支援センターライフ 共働事業所もしや、株式会社北海道共立、NPO法人コミュニティワーク研究実践センター
連携 HTB 北海道のチカラ「今、私たちにできること」、ほっかいどう防災教育協働ネットワーク 防災ひろば

お問い合わせ

3.11SAPPORO SYMPO 実行委員会 札幌市中央区南8条西2丁目 市民活動プラザ星園201 北海道NPO被災者支援ネット 内
TEL:080-3230-5900 E-mail:info@311sapporo-sympo.com



2019年
3月10日(日) 11:00-19:00
3月11日(月) 11:00-19:00

ひとはもっとシンポする。
まちはもっとシンポする。

3.11SAPPORO SYMPO | 3.11SAPPORO Live | 3.11SAPPORO Charities | 今を伝える写真展 | 今が見えるパネル展 ほか

チ・カ・ホ (札幌駅前通地下歩行空間) 北3条交差点広場(西)

東日本大震災・福島第一原子力発電所事故から8年が経ち、9年目を迎えます。「3.11SAPORO SYMPO」は、北海道に避難・移住した人、被災した地で生きる人、そしてその人々とともに歩む道民が気づき、学んだことをこれからのまちづくりに活かすことを目的としています。それが、失われたたくさんの命と、被害を受けた方々とともに生きることであり、だれもが暮らしやすい社会を育てることにつながると信じるからです。

3.11SAPORO SYMPO



だれかの気づきや経験が、「ひと」をつなぎ、「まち」をつくる… サッポロ“シンボ”ジウム

SYMPO ① 南相馬中央図書館 震災後のあゆみ

荒井 宏明 (一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事) / 高橋 将人 (南相馬中央図書館司書)

まちの一部が原発事故の避難指示範囲に入っていた南相馬市は「このような混乱では市民生活が維持できない」と全市民の県外避難に踏み切りました。しかし伝達は各所で滞り、JR常磐線から降ろされた「東京行き」「仙台行き」両方の乗客を収容した南相馬中央図書館では職員が情報収集に走りまわりました。5か月を経て再開した同館は、市内小高区で避難指示が続くなか「正確な情報発信の拠点」「まちづくりを志す市民の集いの場」「読書を楽しむ安息の空間」など様々な機能を果たしてきました。今日までの同館のあゆみを司書の高橋将人さんに語っていただきます。

SYMPO ② だれでもできる小さな世界の救い方《女子部》

猪股 美香 (カフェモリのすみか 元代表) / 三ツ井 瑞恵 (ファシリテーター) / 畠山 真理 (江別市地域おこし協力隊)

「だれでもできる小さな世界の救い方」は、「世の中のことを、ちょっとまじめに考えてみる」機会をつくるために発足された、江別市の市民主体の勉強会チーム。昨年未より、《女子部》として、女性の働き方に特化し勉強する機会を広げています。震災後福島県から北海道に移住し、お母さんの働く場の創造を目指して江別市にてカフェを営んでいた猪股さん、札幌市の男女共同参画センターで女性の起業支援に従事する経験を持つ女子部のファシリテーター三ツ井さん、地元にお母さんの働ける環境が無い状況を改善するべく活動している江別市地域おこし協力隊員畠山さんの3名でのトークセッションです。

SYMPO ③ 誰もがみんな被災者だった —「近助」でつなぐ命—

神童 みえ子 (一般社団法人心和会 障がい者相談支援事業所 とも/宮城県宮城郡松島町) / 大久保 薫 (社会福祉法人あむ 南9条通サポートセンター所長) / 窪田 健介 (社会福祉法人みなみ会 相談室みなみ)

災害に見舞われると、準備していたはずが全く想定できていなかったこと、想定していたけれど機能しなかったことが、たくさん、しかも同時に可視化されます。8年前の東日本大震災の経験は、今、どう生かされているのか。障がい者、要援護者を取りまく環境を通して見てきた「今後に生かすべきこと」は何か。東日本大震災をきっかけに交流を続ける3人が、被災者であり支援者でもある立場、障がい者支援として札幌から被災地(石巻市)へ入った立場、支援される者と支援する者の中で揺れる葛藤。それぞれの観点から、北海道胆振東部地震での状況も踏まえて考えていきます。

SYMPO ④ 原発事故損害賠償・北海道訴訟 —証拠と論点—

伊藤 考一 (弁護士/原発事故被災者支援北海道弁護士 事務局長) / 聞き手:金樂 知子 (北海道NPO被災者支援ネット 代表)

2013年6月21日、札幌地方裁判所に原発事故損害賠償北海道訴訟が提訴されてからもうすぐ6年、2019年3月12日(火)の第23回口頭弁論が終わると、5月中旬には原告の本人尋問、9月に結審、そして、2020年3月に判決が出ます。民事裁判では、原告自ら「証拠」を集めて自分たちの主張を裏付けなければなりません。この裁判でも「原発事故により失われた暮らしそのもの」に対する賠償を求めため、原告は様々な証拠を提出し、被告である国と東京電力はその証拠に対する反論をしています。終盤を迎えた裁判の概要を解説します。

SYMPO ⑤ 等身大の関わりの中で —東日本大震災と大学生の思い—

中脇 まりや (みちのくkids 初代代表) / 竹次 奈映 (一般社団法人北海道ブックシェアリング 企画部主任)

2011年3月11日の震災後、多くの若者が「何かできることを」と支援活動に参加しました。あれから8年が経過し様々なことが変わりゆく中、当時小学生や中学生だった大学生の中に、東日本大震災の被災地や避難者に向き合い、活動している学生たちがいます。震災当時、小・中学生だった彼らは震災から何を感じ、学んでいるのでしょうか。震災から多くを学び、活動や研究を続けている若者たちのトークセッションです。震災後に支援活動を行っていた中脇まりや(みちのくkids 初代代表)と竹次奈映(つながろう東北 初代代表)が学生に問いかけ、その思いを紐解きます。

SYMPO ⑥ 仙台海岸から考える海辺の自然とのつきあい方

平吹 喜彦 (東北学院大学教養学部 地域構想学科 教授) / 松島 肇 (北海道大学大学院農学研究院 講師/北の里浜 花のかけはしネットワーク 副代表)

2011年3月11日に東日本太平洋沿岸を襲い、未曾有の大災害を引き起こした津波は、自然の脅威だけではなく、島国にくらす私たちの生活のあり方についても多くの示唆を与えてくれました。人口減少社会を迎えた日本に必要なのは、もっと自然と向き合っていくことではないでしょうか。グリーンインフラという視点をふまえ、海岸砂丘と生態系の役割や、被災した仙台海岸で研究者や地元の方々取り組みをもとに、海辺で自然とともに生きていくこと、これからの日本のことについて、東北・北海道で海辺の自然環境を研究している2人の研究者とともに考えていきます。

3.11SAPORO Live

※11日(月)14時46分、会場にて黙祷を捧げます。

音楽で思いをつなげるミュージシャンによるライブ&トーク

ニライカナイバンド

妖怪という独自の視点で歌うシンガーソングライター“モノケユースケ”、音楽を通じ災害支援活動を展開するフリースタイルトランベッター“yoshito”を中心に結成。クラシック、ジャズ、ロックなど、メンバーそれぞれ違う畑で培ってきた音楽性がひとつに混じり合い、聴く者をニライカナイへと誘う。



宗前すみれ

2012年(16歳)よりピアノ弾き語りで活動を開始。札幌を中心にライブや音楽イベント、演劇に出演。楽曲提供など多方面で活動中。震災により石巻市雄勝町波板の海岸からハワイに流された船の物語に共感し、「波板の小舟の歌」という曲を制作、2018年11月より波板を応援するツアーを開始。



野花南

嵯峨治彦(馬頭琴、喉歌)と嵯峨孝子(朗読、5弦カンテレ)によるユニット。民族楽器の生演奏と、世界各地の民話や詩の演劇的な朗読を緻密に融合させる独自の音楽スタイルで、全国各地にて公演を行う。ユニット名は北海道中央部の自然豊かな地域「野花南」にちなむ。



吉川Family Presents「僕らの街から」

STVアナウンサー吉川典雄、札幌出身のバンドTRIPLANE、北海道出身の河野玄太が、2011年に立ち上げたチャリティイベント。自分達ができることを続けていく…その思いを、オリジナルソング「輪になって」にこめてライブイベントを行う。北海道胆振東部地震では、厚真町のハスカップ農園への支援を呼びかけている。



林家とんでん平

小樽出身。1980年、初代 林家三平最後の弟子となり、1996年真打。2000年に札幌に移住し、2003年～2015年札幌市議会議員を務めた。東日本大震災、熊本地震被災地で落語公演を行いながら、被災地の様子を各地で語り伝えてきた。北海道胆振東部地震の被災地でも落語を通じて町民の方々との交流を行なっている。

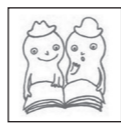


3.11SAPORO Charities

ここで、買ったものがあなたを幸せにしたり、笑顔にしたり…
ここで、お買い物をするのが寄付につながり、誰かを支える…
めぐりめぐって大きな輪になる。

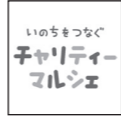


北海道ブックシェアリング 古書販売



一般社団法人 北海道ブックシェアリングは、図書関係者と教育関係者によって2008年に設立。読み終えた本の再活用、読書イベントや読書指導などを通じ「格差のない読書機会」を目的に活動。2017年より「北海道の読書環境整備に向けたネットワーク形成事業(ぶつくらぼ)」を開始。東日本大震災では、宮城県石巻市、岩手県陸前高田市で読書環境の復旧・復興を支援。平成30年北海道胆振東部地震では、むかわ町にて「ウォールペイントで、むかわの街を元気に!実行委員会」をたちあげ、地元の方々とともに商店街の被災した店舗のウォールペイントを行っている。

いのちをつなぐチャリティーマルシェ 道内チーズ工房のチーズと東北物産販売



「生産者である農家の思いに、消費者の思いを重ね合わせ、北海道からたくさんの応援したい気持ちを被災地に届けたい」そんな思いから生まれたマルシェは、2011年3月に全国で最も早い復興支援チャリティイベントとして開催された。単なる物販ではなく、「今、自分たちにできること」を考えながら、「いのちをつなぐ」農家+消費者の協力の仕組みを広げていく場。平成28年台風被害の際は、札幌から南富良野へのボランティアバスを2か月にわたり運行、平成30年北海道胆振東部地震では、安平町での炊き出し支援のほか、安平町の子供たちの支援、被災農家への寄付などを行った。

ペンガアート アート作品



2011年に児童テイクサービスペンガアートとして開所。自閉症などの子どもたちにアートを通じた療育を実践。福祉の枠を超えたアートイベントの開催や展覧を行いながら、多くの人に自閉症スペクトラムなどの障がいに対する正しい理解を広め、子供たちの社会参加への足がかりの一助になることを目指す。その活動は、舞台美術制作や「編んだもんだら」とのコラボ作品制作をきっかけにした東北のお母さんたちとの交流など広がりをみせている。

編んだもんだら アクリルたわし販売・あみあみワークショップ



「編んだもんだら」とは、アクリル100%の毛糸で編んだ、編みぐるみのような洗剤いらずのエコタワシ。震災以降、生活の環境が激変した東北に暮らし女性たちの生きる力を、コミュニティビジネスとして発信していく「さざぼざ」プロジェクトの一環として、女性の「手しごと」を発展させる目的でつくられている。編み手は南三陸町、気仙沼市で津波被害にあったお母さんたち。代金500円のうち40%は編み手に、残りは原材料費と活動資金となり、商品づくりを支える。

時間	10日(日)	11日(月)
11:00	Live ニライカナイバンド	Live 野花南
11:30		
12:00	SYMPO① 南相馬中央図書館 震災後のあゆみ 荒井宏明 高橋将人	SYMPO⑤ 等身大の関わりの中で 中脇まりや 竹次奈映
12:30		
13:00		北海道胆振東部地震を 経験して①
13:30	SYMPO② だれでもできる 小さな世界の救い方 猪股美香 三ツ井瑞恵 畠山真理	
14:00		Live 吉川Family Presents 「僕らの街から」
14:30		
15:00	Live 宗前すみれ	
15:30		北海道胆振東部地震を 経験して②
16:00	SYMPO③ 誰もがみんな被災者だった 神童みえ子 大久保薫 窪田健介	Live 林家とんでん平 温原亨元 五郎
16:30		
17:00		
17:30	SYMPO④ 原発事故損害賠償・ 北海道訴訟 伊藤考一 聞き手:金樂知子	SYMPO⑥ 仙台海岸から考える 海辺の自然とのつきあい方 平吹喜彦 松島肇
18:00		
18:30		
19:00		

きぼうのワークショップ 参加無料

北海道が企業・団体との連携により木育の一環として取り組んでいる(東北にきぼうでメッセージを贈ろう!～「希望」を「きぼう」でプロジェクト)。会場では、被災地の子どもたちにむけて、バーニングペン(電熱ペン)で木の棒にメッセージを書き込むワークショップを開催。集められた「きぼう」は木枠とセットで「きぼうのプール」として被災地の子どもたちに寄贈されます。これまでに完成した「きぼうのプール」10セットは、被災3県や平成28年に台風10号による被害を受けた南富良野町へ届けられました。メッセージの書き込みは15分～20分程度。

小学生以下保護者同伴